

昔むかし、ひとりの男の人が奥さんをなくして、男の子と女の子と三人で暮らしていました。そこへ、新しい奥さんがやって来ました。新しい奥さんは、子どもたちのことがいやでたまりませんでした。

ある日、奥さんは、夫にいました。

「あの子たちを遠くの森に捨てて来ておくれ。二度と顔を見なくてもすむように」それを知った子どもたちは、出かける前に、ポケットに灰をいっぴい詰めこみました。そして、家を出ると、道みち、灰をまいて目印を残しながら歩いていきました。

森の奥まで来ると、お父さんは子どもたちにいました。

「ここにじつとしておいで。お父さんは向こうでたぎぎを切っているから。終わったら呼ぶからね」

子どもたちは長いあいだ待っていましたがお父さんの呼ぶ声はいつまでたっても聞こえてきませんでした。そこでふたりは、道にまいた灰の後をたどって家にもどりました。戸口まで来ると、家の中では晩ご飯を食べているらしく、奥さんの声が聞こえました。

「ああ、あの子たちがいたらいっしょにご飯を食べられるのにねえ」

子どもたちは、

「ぼくたち、ここにいますよ」といいました。お父さんと奥さんはびっくりしました。奥さんは腹を立てましたが、それでも子どもたちを中に入れてやりました。

つぎの朝、奥さんはこっそり夫にいました。

「こんどはもつと遠くまで連れていくんだよ。きのうみたいにもどってこれられないようにね」

出かけるとき、子どもたちはポケットに粟をつめこみ、道みち、粟をまきながら歩いていきました。ところが、小鳥が飛んできて、まいた粟をぜんぶ食べてしまいました。

森のずつと奥まで来ると、お父さんは子どもたちにいました。

「ここにじつとしておいで。お父さんは向こうでたぎぎを切っているから。そのあいだ、カーン、カーンと木を切る音がするから、音がしているあいだは動くんじゃないよ」

お父さんは、かしの木に木靴を結びつけて、風が吹くたびに、カーン、カーンと鳴るようにして、帰ってしまいました。音がやまないので、子どもたちはいつまでもじつと待っていました。

とうとう夜になってしまいました。ふたりは道をさがしましたが、まいた粟は一粒も見つかりません。男の子はどこかに明かりは見えないかと木に登ってみました。すると、明かりがひとつ見えました。

「ずっとずっと遠くのほうに明かりがひとつ見えるよ」

「それじゃ、まっすぐあかりの所へ行きましよう」

ふたりはどンドン歩いて行って、一軒の家にとどりつきました。子どもたちは戸口に立って、

「道に迷ったので、どうかひと晩泊めてください」とたのみました。すると、おかみさんが出てきて、

「おやおや、かわいそうな子どもたちだねえ。でも、ここは悪魔の家だから、泊めることはできないよ。あの人が帰ってきたら、あんたたち、食べられてしまうよ」といいました。

けれども、子どもたちは、どこへ行く当てもないので泊めてほしいと何度もたのみました。そこでしまいに、おかみさんは子どもたちを中へ入れてやり、自分のふたりの子どもといっしょに晩ご飯を食べさせました。それから、

「おまえたち、私の子どもたちと同じベッドで寝るといい。足元のほうにもぐりこめばいいよ」といいました。

悪魔の子どもたちは金の指輪をはめていて、泊めてもらった子どもたちはエニシダの枝の指輪をはめていました。

悪魔の子どもたちが寝てしまうと、男の子と女の子は相談しました。

「この子たちと、指輪と寝る場所を取りかえよう」

そして、悪魔の子どもたちを起こさないように、そうつと指輪をとりかえ、寝る場所も反対側に移しました。

まもなく、悪魔が帰ってきて、家に入るなりいきました。

「クン、クン、生肉のにおいだ、犬のにおいだ」

おかみさんは、

「ぼかだね、雌牛が子を産んだんだよ」といいました。

「いやちがうぞ。生肉のにおいだ、犬のにおいだ」

「雌ブタが子を産んだんだよ」

「クン、クン、いやちがうぞ」

「まったく情けない人だね。子どもがふたり、道に迷って泊めてくれて来てたんだよ」

「そうか、そうか。夕食におあつらえ向きだぞ」

真夜中になると、悪魔はベッドの所へ行ってエニシダの指輪をした子どもたちを食べはじめました。悪魔の子どもたちは、

「父さんわたしを食べないでよ」といいましたが、悪魔は、

「おれはおまえの父さんなんかじゃないぞ」といって、自分の子どもたちを食べ始めてしまいました。

朝になると、ふたりは急いで起きて逃げだしました。走っていくと川があつて、マリアさまが川で洗たくをしていました。子どもたちが、

「悪魔が追いかけてくるの」と話すと、マリアさまは、大急ぎで川にシーツを広げてふたりを渡してくれました。

そこへ、悪魔がやって来ました。悪魔はマリアさまに、

「男の子と女の子が通るのを見なかつたかい」とたずねました。

「ええ、見ましたよ。私が川を渡してやりました。シーツを広げたらその上を通っていきましたよ」

「そうか。それじゃそいつを広げておれも渡してくれ」

マリアさまはシーツを広げ、悪魔はわたりかけました。けれども、とちゅうまで行ったとき、マリアさまがさつとシーツを引っぱったので、悪魔は川に落っこちてしまいました。悪魔は水をたつぷり飲んでしまいました。

子どもたちは、どんどん走っていきました。すると、畑でお百姓がカラス麦をまいていました。子どもたちはお百姓に、

「あしたは、カラス麦を刈り入れに来るといいよ」といいました。お百姓は、

「今わしは種をまいてるんだぞ。あした実っているはずがない。刈り入れなんてできるわけがない」といいました。

「うそじゃないよ。あしたはきつとカラス麦が実っているよ。刈り入れ人を連れて鎌を持っておいで」

子どもたちはそういつて走っていきました。

つぎの日、お百姓は子どもたちにいわれた通り、刈り入れ人を連れて鎌を持って畑にやって来ました。そこへ悪魔が通りかかり、

「男の子と女の子が通るのを見なかつたかい」とたずねました。お百姓は、

「ああ、見たよ。ふたりは、わしがカラス麦をまいているときに、ここを通つていったよ」と答えました。悪魔は、お百姓が刈り入れの鎌を持っているのを見て。

「そんなに前なんじゃあ、今から追いかけても無駄だね」といいました。

こうして、子どもたちは悪魔から逃げることができましたとき。
おしまい